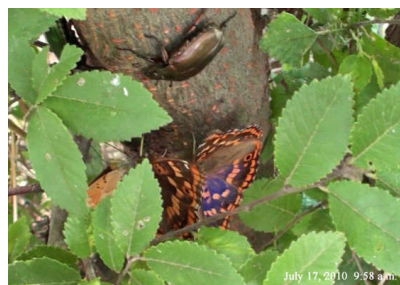


コムラサキは、タテハチョウ科の中で最大の国蝶としても有名なオオムラサキとの比較で小型の紫色をしたチョウという命名ですが、コムラサキ属につけられた学名の *Apatura* がギリシャ語の“あざむく”の意で、それは、太陽光線のあたる角度によって翅表が紫色に輝いたり、まったく紫色がみられなかったりすることに由来していて、この輝きを幻色、物理用語では構造色といいます。「なぜ左右で色がちがうのですか？」と聞かれることもあるチョウですが、紫に輝くのはみだけで早は光りません。オオムラサキも同じでチョウの世界はおおむねみの方がきれいです。

北海道から九州にかけて普通にみられる種で、幼虫がヤナギ類の葉っぱで育ちます。特に、中国から移入されたというシダレヤナギが街路樹として広く植栽されたことで、本来、原野性ヤナギ類のある山地性であったのが平野部にも分布を広げたと考えられています。実は、シダレヤナギが中国から移入されたことはこの記事を書くにあたって幅広く参考とすべく手元に広げる10種以上の図鑑、あるいは資料類を通じて初めて知ったことで、一連の原稿作成は私自身にとってもたいへん勉強になっています。

ゴマダラチョウとよく似た滑翔が得意で、スイスイと流れるように飛んでいるかと思うと突然木立の間に入り込んで見えなくなりますが、その行き先にはたいがいチョウにとっての食堂であ



る樹液があります。コムラサキは身近には少なく、写真左は筆者にとって高砂での撮影初記録で西畑斎場周辺のアキニレ樹液、中央は加古川河川敷でカワヤナギ近くにあったアキニレ樹液、右は荒井町新浜工業公園のタブノキ樹液にきた個体で近隣では9年振りの観察です。

コムラサキには遺伝的変異があって、羽の地色が褐色（優性）のタイプと黒色型（劣性）があり、クロコムラサキとよばれる黒いタイプの分布は狭く限られて珍しいチョウとなります。私の手元には熊本の高校の先生から送ってもらった標本がありますが、郵送中に外れた羽を接着剤で修復した記念すべき貴重な標本です。

コムラサキは寒冷地で発生する個体がとりわけ紫光沢が濃くて美しいとなりますが、ヒオドシチョウの項で触れた北海道富良野では、食樹のヤナギ類が密生する林道路



June 26, 1972 宮崎高千穂町河内

面のいたるところで紫幻色を輝かせながらおびたしい数で集団吸水する光景を見ました。キタキツネのものと思われる獣糞に集まる場面の撮影記録は、濃い紫幻色がうまくキャッチできましたが、両方の羽が紫に輝くように撮影するのは容易ではありません。